

語を分割する単位について

——語構成論入門書が引き起こす誤解——

中 道 知 子

The Units Used to Analyze Word

Tomoko NAKAMICHI

要旨

語構成論においては、語の構成要素をどのような単位として分割し認定するかが基本的な重要事項である。この単位認定において、初学者を対象とする入門書では、形態論や統語論分野における単位の扱いとの関係において、誤解を与えがちな記述が見られる。本稿では、専門用語辞典と入門書の記述を検討して、上述のような混乱が、「形態素」の概念と「意味を担う」という概念のあいまいな扱い方と、統語論的ないしは形態論的な単位と語彙論的な単位との区別が不十分なことの2点に起因すると判断した。

1 問題の所在

本稿で扱っている問題の所在を、疑問の形で提示すると次のようになる。

- 1 語彙的意味を持つ部分というものと形態素とはどういう関係なのか
- 2 「寒い」は単純語なのか派生語なのか
- 3 「読む」は単純語なのか派生語なのか

日本語学は、言語学的考え方と国語学的考え方が、食い違いを見せるときがある。本稿では語彙論の入門的書籍と専門用語辞典を対象として、その食い違いから記述に矛盾がある点を詳しく見ていきたい。

2 入門的書籍に見られる矛盾について

ここでは、入門的書籍として次の2書を取り上げる。

- (1) 秋元美晴 (2002) 『よくわかる語彙』
- (2) 斎藤倫明 (1989) 「語構成 I」 森田良行他編 『ケーススタディ 日本語の語彙』

2-1【秋元 2002】の扱いについて (資料 1)。(注 1)

- ① 動詞「起きる」、形容詞「寒い」は、それ以上分割できない単純語として扱われている。(P.82)

- ② 「高さ」は派生語の例としてあげられている。(P.82)
- ③ 名詞性接尾辞の例として「重さ」の「-さ」、形容詞性接尾辞の例として「茶色い」の「-い」を、形容詞をつくる接尾辞の例として「青い」の「-い」を挙げている。(P.92)
- ④ 名詞をつくる接尾辞の例として「重さ」の「-さ」を、動詞をつくる接尾辞の例として「デモる」の「-る」を挙げている。(P.92)
- ⑤ 「形態素」については、「有意味の最小単位」と言い換え、「男たち」の「男」は自由形態素、「たち」は拘束形態素であると述べている。

この【秋元 2002】の扱いには、矛盾がある。

まず、形容詞の扱いについてだが、「重さ」の「-さ」や「青い」の「-い」が接辞であるなら、「重い」は「重-い」に、「青い」は「青-い」に分割できることになり、派生語であるということになる。「寒い」は「重い」「青い」と同資格の形容詞であり、したがって「寒い」が単純語であるというのは無理が生じる。仮に、秋元の立場を、「茶色」「青」という名詞の存在を前提として形容詞をつくる接辞「-い」を認定するという立場を取っていると解釈したとしても、「重さ」における「-さ」を接辞として分離する立場を取った時点で、矛盾が生じている。なぜなら、「重」は「茶色」「青」のような独立性がないにもかかわらず、「重-さ」という分析がなされているからである。

2-2【斎藤 1989】の扱いについて (資料 2)。(注 1)

- ① もうそれ以上小さい部分に分けることのできないものの語例として「歩く、走る、起きる、食べる」を挙げている。(P.50)
- ② 単純語の例として「読む」「眺める」を挙げている。(P.51)
- ③ 複合語の例として「安物」「古本」を挙げ、「安-」「古-」を単独では使えない語基であると述べている。(P.51)
- ⑤ 「か弱い」は、「か-弱-い」という構成要素に分析できると述べている。(P.51)
- ④ 動詞性接尾辞の例として「サボる」の「-る」を、名詞性接尾辞の例として「速さ」の「-さ」を、形容詞性接尾辞の例として「茶色い」の「-い」を挙げている。(P.59)

(注 2)

【斎藤 1989】の扱いにおける、少なくとも形容詞の部分には、秋元の場合と同じ矛盾がある。動詞については後述する。

3 矛盾の生じる元について

前節で検証したような矛盾が生じる元は、「それ以上分けられるかどうか」ということを判定する基準にある。すなわち、「どういう場合に分けられるというのか」という点をはっきり規定しないままに論を進めているということである。入門書という性格上、理論的な面をあまり詳しく追究しない

ことは無理からぬことともいえるが、今の場合は、その点をあいまいにした結果として矛盾が生じてきている。

「それ以上分けられるかどうか」というとき、そこにある前提は「有意味性を保った上で」である。すなわち「意味を持つ最小の単位に分けられるか」ということを問題にしている。本稿では、この観点からする分析を「形態素」の分析であるとみなす。(注3)

形態素の概念をどのように用いているかについてみると、【斎藤 1989】では形態素という用語を使っていない。また、【秋元 2002】は形態素という単位が存在することを、最後に簡単に述べるにとどまり、語構成の分析を進めるに当たっては形態素の概念に言及せずに論を進めている。

問題は次のように整理できると思う。

問題点1 語を分割する単位として「形態素」を使うのかどうか。

問題点2 「語基」「接辞」という要素について、「意味を担う」ということをどう関連付けるのか。

4 語を分割する単位について

【斎藤 1989】では次のように書かれている。

すなわち、語構成要素には、一語の意味の中核的な部分を担う要素（語基）と、補助的、あるいは形式的な意味しか担っていない要素（接辞、ex.. 素-、小-、真-、-冊、-つばい etc.）との二種類があり、(P.51)

語基は語と同形、すなわち単独で使いうる形式である場合が多いが、上例、安物、古本、の「安-」「古-」のように、単独では使えない形式である場合も少なくない。(P.51)

【秋元 2002】では次のように書かれている。

語基は語の意味上中心となる重要な部分で、語と同形で単独で使いうる形式である。以上、整理すると次のように分類することができる。(P.82)

見てのとおり、秋元の語基の定義は不完全であり、この定義に従うと、斎藤が挙げている「安-」「古-」は、語基といえないことになる。

語基の認め方については、国語学大辞典においても執筆者によって見解が異なっている。

宮島達夫「語構成」『国語学大辞典』P.424 ①は、次のように記述してある（資料3）。

単語を形態素に分解したとき、ただ一つの形態素から成るものを「単純語」と呼び、二つ以上から成るものを「合成語」と呼ぶ。(中略) 一面で合成語は分解可能な文法形式と区別しなければならない。「ひろ-い」「ひろ-く」「ひろかつ-た」は、それぞれ-のところで分析でき、二つ以上の要素からなる形式ではあるが、合成語ではない。なぜなら、これらは同じ単語の違った語形にすぎず、別々の単語ではないからである。これに対して。「ひろ-さ」「ひろ-げる」は、「ひろ-い」と別の単語だから、合成語である。つまり、単に語形を作るに過ぎない文法的な要素（語

尾、いわゆる助詞・助動詞も文法的という点ではこれと同じ）と、新しい単語を作るための語彙的な要素（接辞）とを区別しなければならない。合成語とは、正確に言えば、二つ以上の語彙的形態素からなる語である。しかし、この両者の違いは連続的であり段階的である。

一方、森岡健二「和語」『国語学大辞典』P.938 ③には次のような記述がある（資料5）。

（和語の語基の）結合形式（bound form、拘束形式ともいう）には次の六種があり、それぞれ小接辞を伴って各種の語に派生する。e 形式（高＝・深＝・広＝・暑＝・寒＝・悲し＝・美し＝）は、＝い・＝まる・＝がるを伴って用言、＝さを伴って体言、＝げを伴って準体言などになる。

すなわち、「広い」は、宮島に従えば合成語（派生語）ではなく、森岡に従えば合成語（派生語）だということになるわけである。宮島の議論は結局次のようなものだと解釈できる。

「ひろい」は「ひろ」と「い」という二つの形態素に分割される。「い」は、「ひろい」が統語論的な語形変化をするときの形態をつくる要素の一つであるから、接辞として認定しない。すなわち「ひろい」は単純語である。「ひろさ」は「ひろ」と「さ」という二つの形態素に分割される。「ひろさ」は、「ひろい」や「ひろげる」と並べてみた場合に、形態論的に独立した単位になっているから、「さ」は接辞であると認定し、「ひろさ」は合成語（派生語）である。

これに対して森岡は、「ひろい」の「い」は、統語論的な機能形態素ではなく、「さ」とともに独立した形態を作るための単位であるとして、「ひろい」を派生語と認定するのである。

「形態素」と「語彙的意味」とを関係付ける記述は、国語学大辞典のなかの坂倉篤義による派生語の記述にも見られる（資料4）。坂倉は、合成語は二つ以上の語彙的意味を持つ部分に分析できると言っているので、派生語の構成要素である接辞も語彙的意味を持つように読み取れる。語幹であるか接辞であるかの判定基準は、要素の用法上の独立性にあるというふうに読み取れる書き方である。しかし、これは、形態素の意味的な側面の性質と、自由形式か拘束形式かという形態論的な側面との性質を、性急にまとめた扱いではないだろうか。

宮島と坂倉が言及している「語彙的形態素」とは、「機能的または形式的形態素」とならんで、形態素の二つの種類とされている。そして、語の構成要素のうちの基幹的部分を語基と言うというふうな言い方をする。ここに、用語と概念の混乱の元があるのではないだろうか。

5 用語と概念について

日本語学において、統語論的あるいは形態論的な議論のなかで動詞を扱うときには、いわゆる活用語尾として語末の「u」または「ru」を抽出する。たとえば、「読む」を「yom-u」、「食べる」を「tabe-ru」と分析することによって、「読む」類に子音語幹動詞という名称を、「食べる」類に母音語幹動詞という名称を与え、それぞれの活用語尾が「u」または「ru」であるとしている。この活用語尾は、たとえば非過去というテンスにおいては、「ta」という形になる。この議論において、抽出している単位は形態素である。（注4）そして形態素が担っている意味は、「yom」「tabe」においては語彙として

の意味であり、「u」「ru」においては活用形という統語論的ないしは形態論的な意味である。

形態素というのは、このように、どのような種類の意味であろうがとにかく意味を担う最小の形式という使い方がされているのである。もし、語構成論の議論の中で、形態素という概念と用語を使うならそれは動詞の構成要素を分析するときと同じ使い方でなければ混乱をきたす。

もし、概念と用語を徹底させるなら、次のような扱いにするのが適当であろう。

語を分析するときの単位は、意味を担う最小単位としての形態素を単位とする。その際に、語彙の意味か否かは関係させない。語構成論においても形態素の概念を統一的に用いる以上、「しろい(白い)」は、「しろ siro」と「い i」に分析されることになる。さらに、語構成論において、語基と接辞と言う概念と用語については、語を paradigmatic に通観したとき、「しろい」は「しろさ」「しろみ」などとの関係から「い」を語彙論的な独立単位として切り出すことができ、「しろ」が語彙的で中心的な要素であり、「い」は「さ」「み」と並んで附属的な要素と言えるから、前者を語基と呼び、後者を接辞と呼ぶ。このことはすなわち、「しろい」は、語基「しろ」に接辞「い」が付いた派生語であるということになる。一方、「はなす(話す)」は、「hanas」と「u」に形態素分析できるが、paradigmatic な観点からは、「u」は、統語論的ないしは形態論的な単位としては独立した単位だが語彙論的な単位としては独立した単位とは言えない。したがって、「u」に対して、接辞という用語を使うことは避けることにする。

6 結び

本稿で扱った問題を考えるきっかけは、日本語教師養成を目的とした教育において使われているテキストの記述に矛盾が見られたことである。言語の分析（この場合は日本語であるが）の初心者である人にとって、形容詞「白い」は「しろ」と「い」に分析できるということを文法論の講義で聞いたにもかかわらず、語彙論の講義においては「しろい」はそれ以上分析できない単純語であるといわれたら、混乱し納得できないことになるだろう。より専門的なことを調べようとして、国語学大辞典を調べても、前述のような食い違う見解に遭遇する。

このような矛盾や混乱は、形態素という言語学ではなじみの深い基礎的な概念と用語を用いながら、一方では、国語学的な伝統のある語基・接辞という概念と用語も使い、その相互に矛盾する点をじゅうぶんに整理しないまま論を進めていることからきていると思う。入門書においては、初心者のために煩雑になりがちな理論的背景の説明を避けようとしたことからかえって起きてしまった混乱であろうが、国語学大辞典においては、専門性の高い書物であるという性格上からは、上述のような、統語論的ないしは形態論的な単位と語彙論的な単位との区別に読者の注意を向ける記述があってほしいと感じるものである。

注

- (注1) 参照部分を本稿末尾に「資料」として引用した。引用が長くなる欠点はあるが、本稿の叙述を検証するための便宜としてあえてそのようにしたものである。
- (注2) 秋元(2002)の参考文献リストには、斎藤(1989)は挙げられていない。
- (注3) 語彙的形態素と機能的形態素とは形態素の下位分類であるという立場を取る。
- (注4) 厳密には、形態素と形態を区別して論じるべきだが、今は形態を指す場合にも形態素という用語をもって済ませている。したがって、記述形式も形態素と形態を区別せずに「」に入れて記している。

資料

1 秋元美晴(2002)『よくわかる語彙』

P.82

語には、「海」「本」「わたし」「起きる」「もし」「はい」などのように、それ以上小さい部分に分けられないものと、「本箱」のように「本」と「箱」、「飛び出す」のように「飛び(ぶ)」と「出す」、「不器用」のように「不」と「器用」などのようにさらに小さい部分に分けられるものがある。(中略)

語基は語の意味上中心となる重要な部分で、語と同形で単独で使いうる形式である。以上、整理すると次のように分類することができる。

語

単純語……男、心、わたし、書く、寒い、もし 等

合成語

複合語……本箱、男心、山登り、飛び出す 等

畳語……人びと、泣き泣き、時どき 等

派生語……お茶、不器用、男っぽい、高さ、大人ぶる 等

なお、形態素(有意味の最小単位)という用語が使われることがある。例えば、「男たち」は「男」と「たち」がそれぞれ形態素であり、「男」は自由形態素、「たち」は拘束形態素といわれる。

P.92

接尾辞を品詞性と意味などを考慮して分類すると、次のようになる。

- ① 名詞性接尾辞例。(a~f略) g.. 抽象性質表示……重さ、アルカリ性、子供用
- ② 動詞性接尾辞(略)
- ③ 形容詞性接尾辞……例. 茶色い、子供っぽい、恩着せがましい
- ④ 形容動詞性接尾辞(略)
- ⑤ 副詞性接尾辞(略)

なお、接尾辞には単に意味を添えるものと、同時に結合対象となる語基の品詞性を変えるものがある。品詞性を変えるものの代表的なものは、次のように分類することができる。

① 名詞をつくるもの（略）

② 動詞をつくるもの例．-がる・・・ ほしがる、いやがる

-ぶる・・・大人ぶる、上品ぶる

-めく・・・春めく、よろめく

-る・・・デモる

-する・・・勉強する

③ 形容詞をつくるもの例．-い・・・ 青い

－っぽい・・・子供っぽい、あきっぽい

－らしい・・・男らしい、わざとらしい

④ 形容動詞の語幹をつくるもの（略）

⑤ 副詞をつくるもの（略）

2 斎藤倫明（1989）「語構成Ⅰ」

P.50

(1) 山川本机わたし歩く走る起きる食べるゆっくりかなりもししかしいいえ

(2) a お寺素顔小高い君たち深み春めく汗ばむ男っぽい

b 春風草木本だな山登り夜明け買い物考え事通り抜ける嘆き悲しむなぐり書き心細い話し好き

単語の中には、上記（1）のように、もうそれ以上小さい部分に分けることのできないものと、（2）のように、意味と形の上から見てさらに幾つかの部分に分けることのできるものとが存在するが、そういう単語のつくられ方の側面を語構成と言い、そういう観点から見た単語のさまざまな性質を研究する分野を語構成論と言う。

P.51

合成語をさらに下位区分するには、それら合成語を構成する要素（語構成要素）に注目する必要がある。すなわち、語構成要素には、一語の意味の中核的な部分を担う要素（語基）と、補助的、あるいは形式的な意味しか担っていない要素（接辞、ex.. 素-、小-、真-、-冊、-っぽい etc.）との二種類があり、ふつう、語基2個からなるものを複合語、語基と接辞から成るものを派生語と区別する。なお、単純語は語基1個からのみ成ると考える。

以上からわかるように、単語は語構成上から次のように分類される。

単語 単純語（語基1個） ex. ①人読む、必ず、チョーク、眺める

合成語

派生語（語基＋接辞） ex. 素肌、真心、三冊、ぶん殴る、真中、無理っぽい、

複合語（語基＋語基） ex. …………….. 書く加える、絵画き、紫色、安物、古本、

なお、語基は語と同形、すなわち単独で使いうる形式である場合が多いが、上例、安物、古本、の「安-」「古-」のように、単独では使えない形式である場合も少なくない。接辞は常に単独では使えない形式である。

単語を語構成の観点から分類する際には、以下のような点に注意しなければならない。

- 1 最終段階の結合によって判定するということ。田追えば、①～④（注：①さ迷い出る②か弱い③受取人④婦人参政権）に関して構成要素に分けられるだけ分けるとすれば、①さ-迷い-出る、②か-弱い、③受-取-人、④婦人-参政-権、となるが、（後略）。

P.59

B 動詞性接尾辞→嫌-がる、汗-ばむ、才子-ぶる、弱-まる、サボ-る

C 形容詞性接尾辞→茶色-い、未練-がましい、理屈-っぽい

3 『国語学大辞典』P.424 ①語構成のうち【合成】（宮島達夫）

単語を形態素に分解したとき、ただ一つの形態素から成るものを「単純語」と呼び、二つ以上から成るものを「合成語」と呼ぶ。（中略）一面で合成語は分解可能な文法形式と区別しなければならない。「ひろ-い」「ひろ-く」「ひろかつ-た」は、それぞれ-のところで分析でき、二つ以上の要素からなる形式ではあるが、合成語ではない。なぜなら、これらは同じ単語の違った語形にすぎず、別々の単語ではないからである。これに対して。「ひろ-さ」「ひろ-げる」は、「ひろ-い」と別の単語だから、合成語である。つまり、単に語形を作るに過ぎない文法的な要素（語尾、いわゆる助詞・助動詞も文法的という点ではこれと同じ）と、新しい単語を作るための語彙的な要素（接辞）とを区別しなければならない。合成語とは、正確に言えば、二つ以上の語彙的形態素からなる語である。しかし、この両者の違いは連続的であり段階的である。たとえば、一般的な扱いによれば、「みる」から「みられる」「みさせる」をつくる手つづきは、広い意味での語形づくりであり文法的なものだが、「みえる」「みせる」は別語だから、これをつくるのは語構成である。一方、合成語と連語との差は、もっとあいまいである。「空たかく」「二の次」「赤い羽根」などはどちらであるか。（中略）語彙的な形態素は、単語の中心部分をなす「語基（語根）」と、これに附属する「接辞」とに分けられる。「山」「道」「ひろ」は語基であり、「小-」「-げる」は接辞である。ただし、「語基」はまた文法的に「語幹」と似た意味で使われることもあり、「語根」は歴史的にさかのぼって分解して得られた要素や語基のうちで自立しないもの（「しずか」「ほのか」の「しず」「ほの」）だけを指すこともあって、内容が一定していない。（後略）

4 『国語学大辞典』P.706 ④派生語（坂倉篤義）

単語が、その構成より見て、二つ以上の語彙的意味を持つ部分（形態素）に分析しうると認められるとき、これを合成語という。そのうち、本来単独の用法を持ち得る二つ以上の語の合成になると認められるものを複合語と呼ぶのに対して、例えば「親たち」「非公式的」のように、意味及び形の上から本来独立の用法を持ち得る一つの語と、一つ以上の非独立的要素（例えば右の「たち」「非」「的」など）との合成によると認められるものを派生語と呼ぶ。このような語の構成法を派生法と言い、その際、新しく構成される単語の機関部となる要素（右の例で言えば「親」「公式」など）を語基、これに結合される非独立的な要素を接辞と言う。（後略）

5 『国語学大辞典』P.938 ③和語（森岡健二）

【和語の語基】（前略）和語の語基（stem）には次の10種があり、それぞれの規則に従って語を構成する。このうち自立形式（free form）は四種で、日本語の品詞の基盤をなしている。（中略）c形式（書き（か）・起（お）き・受（う）け・来（き）・為（し））は自立して用言になり、それ自身で、もしくはば・けれど・て・のに（接続助詞）などにより文節を造る。（中略）

次に結合形式（bound form、拘束形式ともいう）には次の六種があり、それぞれ小接辞を伴って各種の語に派生する。e形式（高＝・深＝・広＝・暑＝・寒＝・悲し＝・美し＝）は、＝い・＝まる・＝がるを伴って用言、＝さを伴って体言、＝げを伴って準体言などになる。

【和語の語構成】和語は右の語基を構成要素として造られるが、構成上の性質から次の種類に分けることができる。（1）単一語 a・b・c・d の語基が自立して語になったもので、春（体言）、哀れ（準体言）、書く（用言）、直ぐ（副用言）など。（中略）（3）派生語語基＝接辞、接辞＝語基の構造をとるもので、子＝ども、花＝やぐ、哀れっ＝ぽい、飲ま＝す、白＝い、静＝か、ひと＝つ、こ＝こ、お＝なか、お＝早う、新＝妻など。

参考文献

秋元美晴（2002）『よくわかる語彙』アルク

坂倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店

森田良行・村木新次郎・相澤正夫編（1989）『ケーススタディ日本語の語彙』おうふう

国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版

山口秋穂・秋本守英編『日本語文法大事典』明治書院

（2006年9月25日受理）